幡隨意上人傳

上

幡隨意上人傳序

有大權出世名曰幡隨意上人其胎願
輪來攜洪化也施慈惠振智辯伏邪徒
現希奇誘導黎庶嚮于西刹道蹟神異
乃示一切得思議者矣住者華洛五刹院
喚譽選行化傳以布于世焉又有上人
七世正宗妙導師述行狀記鐫于開左

九曜文庫

蓋是法孫奚世所誦傳而爲家藪矣也
爲其體製用漢辭而示便于童蒙爰神
田山見住彩譽上人迎開祖二百子十
四忌辰撮要法傳加以圖繪鋟于梓意
在助披閱之勞矣余若奉
台命住終南山叨董勝蹟徧弱芳躅記
傳之所錄實非過讃大推之垂化誰敢
容疑今聞此舉不堪隨喜聊冠數言卷
首云
文久二年歲次壬戌十月
增上寺大僧正闡教音撰

幡隨意上人傳上

上人名ハ幡隨意。演蓮社智譽向阿と號し。又白道と称ス。相摸國坂土莊藤澤郷。漸教寺村乃人なり。俗氏を山宮と以ふ。武田氏乃支族ノ子。父ハ通称を金吾少以へ。子なきさゝを憂ひて熊野大權現ふ祈けるに。一夜妻室の夢ふ。熊野宮ふ詣し給を度ふを見るふ。以ゝ金色ハ大熊弛ふ。

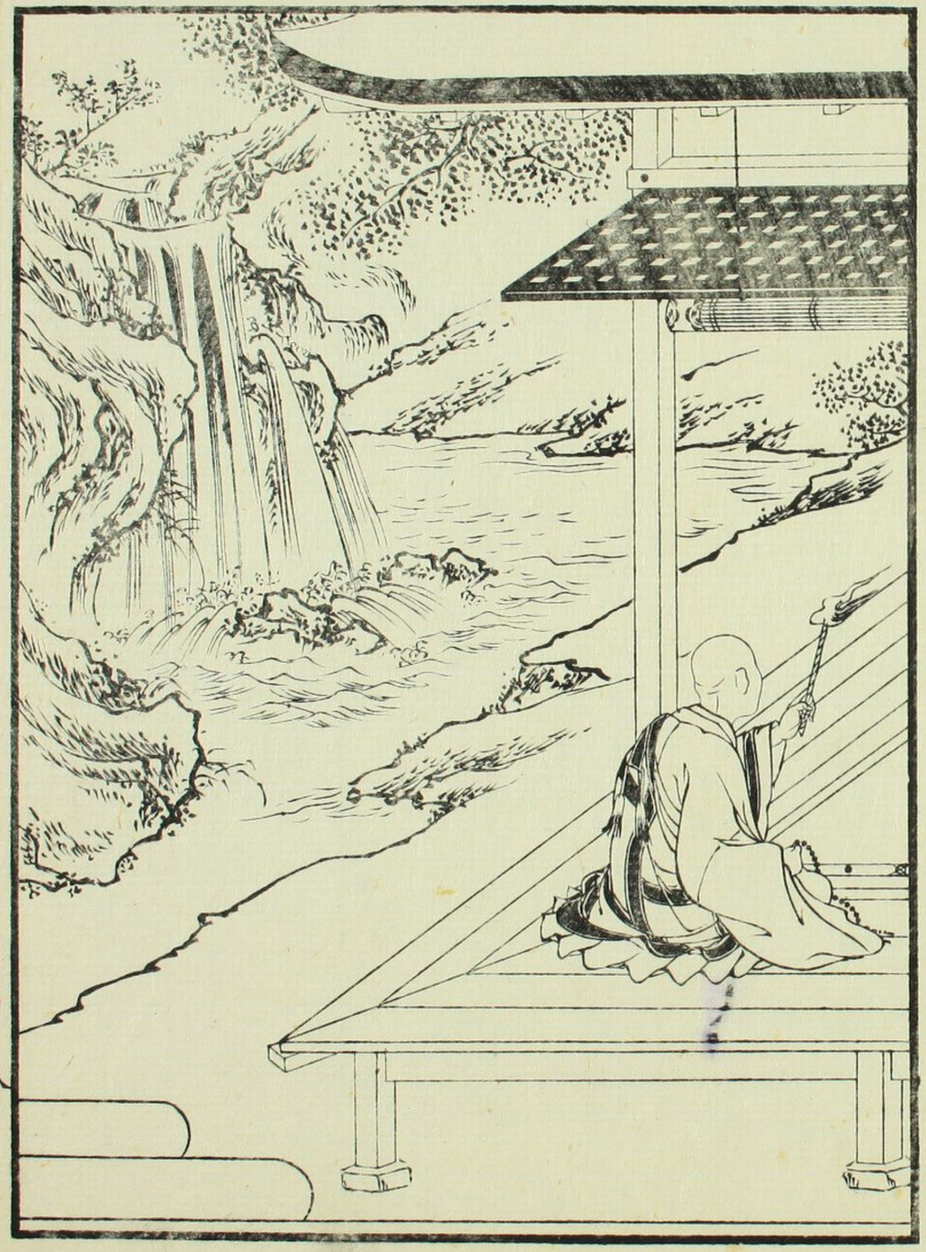
化して明珠となりて口ゝ入るゝを見まゐらせ覚て後夫ゝ語まゐり。夫ゝ其を聞て奇想をなし。宮て吉夢なるを。汝ゝ孕むことあらバ必男児を生ばべしゝ云へ。妻宮を後懐胎をおぼえ給ふ。身乃新作をつゝ葷羶を断て。この月胎満て男子を生まゐ。其時ゝ鳥稲穂を銜て産屋の上ゝ集まりて。この鳥稲穂を産生産を祝する所ゝ云へり。近藤氏人ゝ

つゝ古事を称歎をなせり。是ハ天文十一年十月十五日乃事なり

上人乃世系を一説ゝ川島氏ゝて小條乃支族なり。父乃通称を隼人といひ。代ゝ上聖宮ゝ仕めりしを。隼人の時ゝ稲荷乃奥ゝ自栄勧請乃奥ゝ記しおくせのるを写しなるゝて。上人法孫の伝説なり。又一説ゝ家ハ武田氏より出されども小條乃ゝ属ゝたるなり。其支族なるをもて伝へる有りもいへり。坂土荘今ゝて大庭荘と号し。村名の郡義も吾紀乃字を用ふ。彼所を名るゝ。上人誕生の地ゝ在湯井と云ふ清泉あり。さて山宮氏乃末葉なりしゝ云ふ。ハ家ゝ伝りて。これ松本氏を呼べ。芳川島氏を称へたるもなりし由をいへ。ど。家ゝ伝へる記録なゝ。委くハ知まゝ

甚児生れつゝ凡庸なるに。襁褓ゐなる頃より。佛菩
薩乃像を見て歓喜れ容をれし。其他乃挙動群児ゑ
異ゐて。五六歳のころより。沙門を敬ひ僻ゐ事。
九歳ゑ及びて自出家を願へて。父母敢て許さゞり
しかども。強て求るゐとりて十一歳れ時許して出塵
をゝむ。然ゐハ同國乃玉縄なる二傳寺れ。範誉義順
上人 鎌倉光明寺第十五世法誉上人の資ゐて浄土白旗流義嫡兼乃師なり ハ。智道兼備

乃大徳ゆり。ゐる夜れ羨ゐ。青衣の童子白幡を執て
彼児れ後ゐ立て。此児ハ世乃福田なり。是故ゑ日夜
ゐ守護す。我ハ帝釋天乃使者なりと乃ゐ。覚て後奇
想をれし。即山宮氏の家ゐ来り此事を告ゆれば
り。父母大ゑ感歎し上人を請して師とせり。幡随意
とゆゝ名ハ。上人れ羨おゐとりて授ゆへゐなり



剃染せ後。本師の提撕をうるまと數年ふ〜てまる
鎌倉光明寺ふ掛錫〜て。内外れ典籍を研ふ宗教乃
深義を會し。弱冠ふ〜て才學絶倫れ叢あり。講筵ふ
列し議場ふ臨むさとり。敢て智鋒ふ當る者れし。遂
ふ同寺奉誉上人 範誉上人の弟子ゆて 即上人乃法兄るり れ印可を得て。宗
戒両脉おらび布薩大戒を傳兼〜。学膄満るふ至り
て。香衣上人乃 綸命をうるまるへりこのゝて後。武蔵

國乃川越ふる。蓮馨寺れ感誉存貞上人乃。希世の龍
象ふ〜て蓮門の学徒輻湊ゆと聞て。即名籍を通じ
輪下ふ入まて。存應 即増上寺中興 清巌全受等の諸
師ゝ〜もり。研精講論しゆへ事。彼諸師ゝれ神氣高
邁。智鮮超倫ふふるゝりて。世人叢林れ四哲と称れ。
我宗檀林乃学範。宗義れ要決今ふ至るまで連綿
ちふハ。ゝれ 此法大徳乃遺績あり

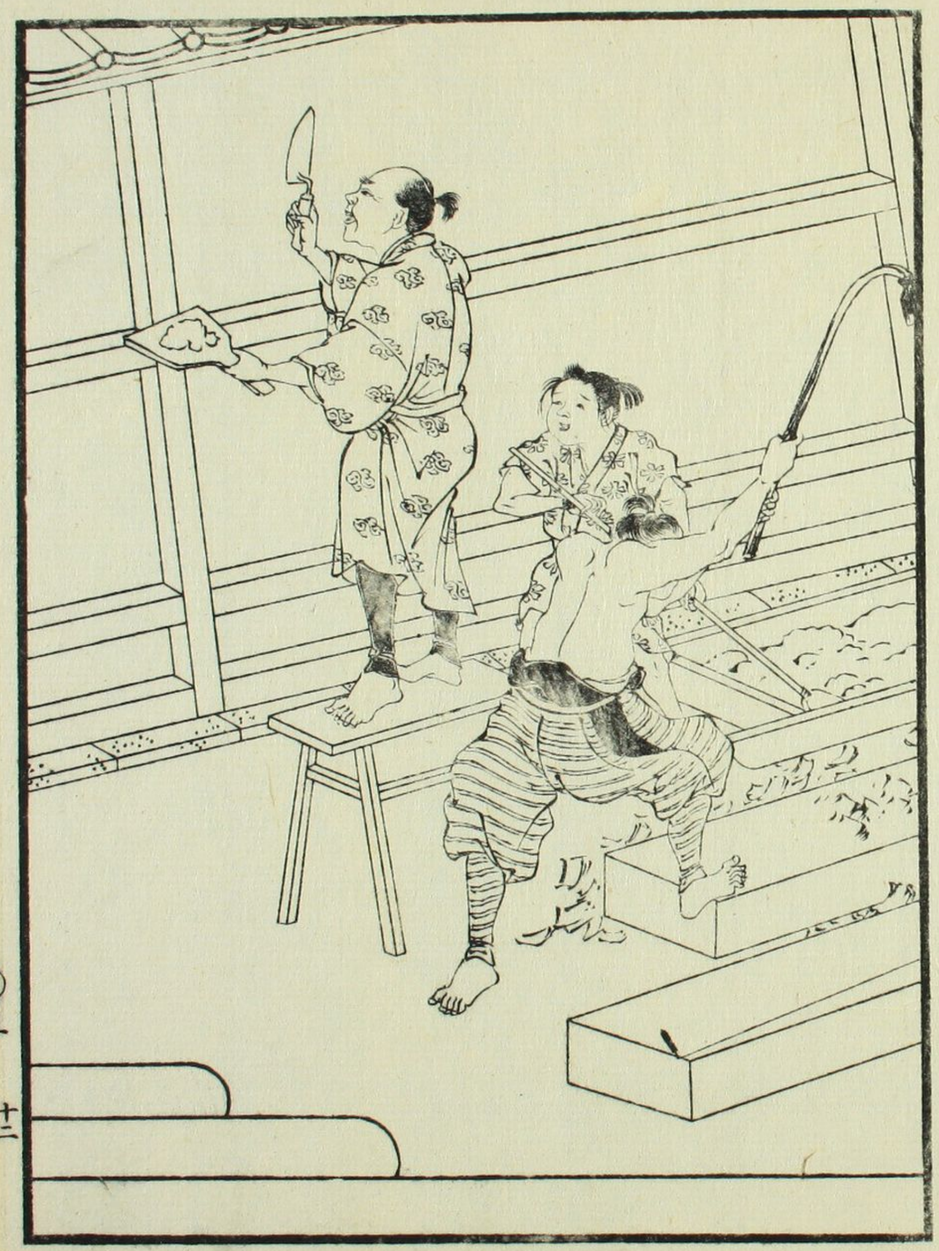
天正三年。上人歳三十四。学行やゝ功を積るゝ因て。ほゞ〻化他ゝ赴おもむくるゝ。一時上野國館林ちゝ。見性院ゝ住して念佛を弘めゝ。遠近の道俗化導を蒙る者甚多し。時乃城主。榊原康政朝臣涼く帰依し。上人を開祖として伽藍を建立せられぬ。終南山善導寺是なり。即香火寺やゝて。庄田百石を寄附をゝきなり。上人学徒をひつめて宗義を

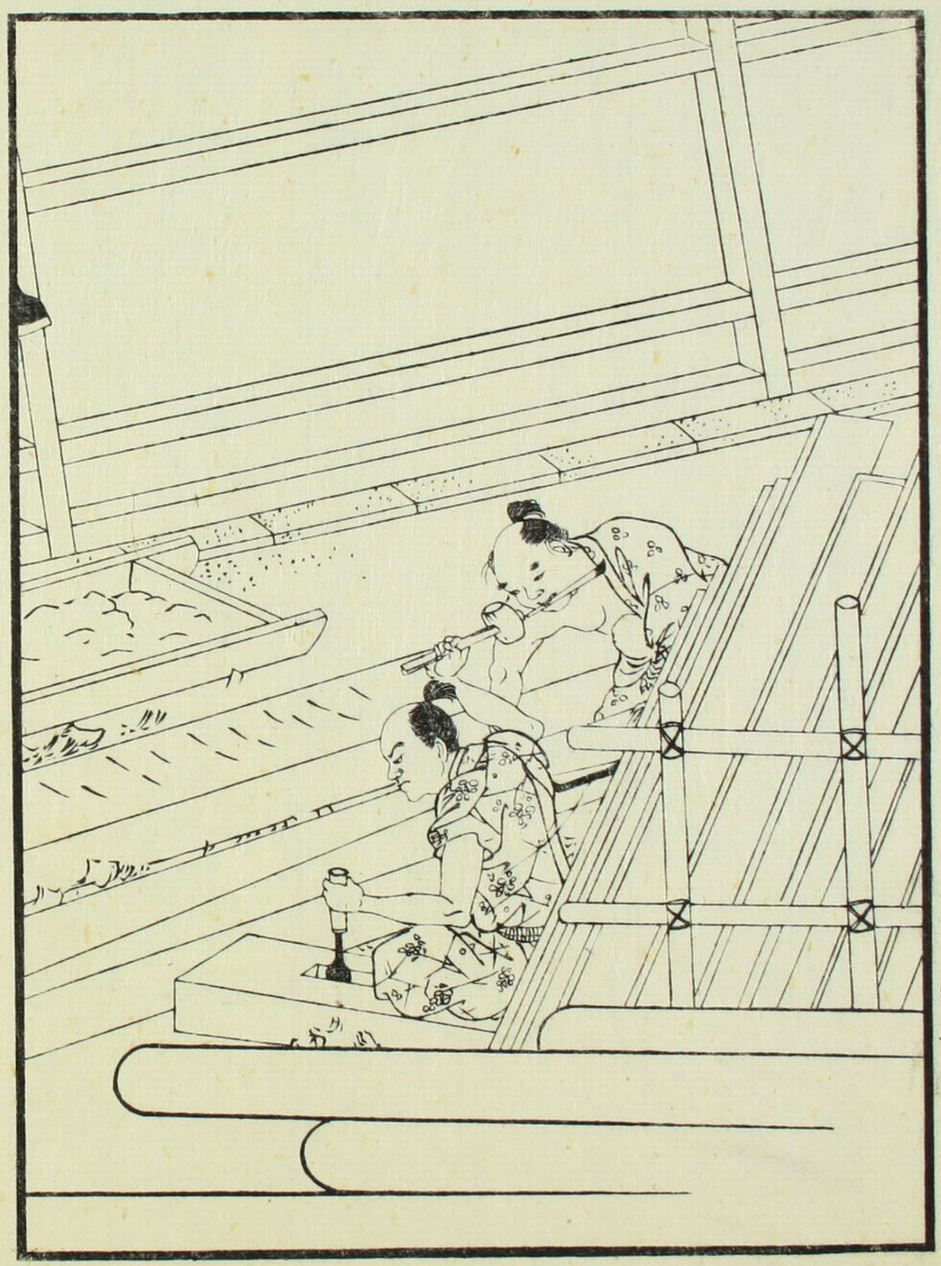
研究せゝ〻。論議一百條を選び與へて学則とした まひ。ゝ他乃述作若干るゝ〻ゝ

東照神君。開東ゝて十八檀林を定め給へる時。此寺も其列ゝ加へゝひて。代々 台命住持乃名刹とれ

ゝ。 大猷公ゝ時供田若干を賜ハゝ。山林諸役免除

乃 朱章を給ハき書





一時弘教のためふ。越後路よおもむき高田なる善
導ちふ留場し。法人を勧めて彼寺を中興し。真宗浄
土の安心を説き。専修念佛の勝益を布演し給ふ
ふ。士庶おのゝちなて道化をうけ。前来の宗を改免
浄土門に帰入する者甚多こり。密宗乃徒これを嫉
こ。讒言を搆へ城主ふ訴へて。寛誅ふおよぶべきむ
ゆきり。上人此事を知らずおはしこ。一日天ふふ
ちるもまて大雨降ぬ。のゝて二三日ほどう
ちづおたり。をまゝ上人はもり閑室ふありて
念佛しるまひるる。庭前よれるまひて一女現き
出如。を容ちれ考ゝば。上人あやしこ何者ちふぞ
や問給へば。彼答て我ハ龍女ぬり。のゝれ慈濟ち依
て畜趣を免まむとれへる。上人袁て曰。昔釋迦世尊
妙経を説給ふ時。八歳の龍女開化をうけて成佛

せり。彼ハ上機なれバとて怯退の心を起すなれ
ども。我弥陀覚王ハ超世ノ本願まゝ〳〵ほして。普く三
途の重苦を救ひたまへり。彼ハ邪を捨て念佛
せむ。ものゝ解脱を得べし〳〵。宗教ノ精要を
況ん。十念を授け譜脉をもつて。王蓮妙龍と名づけ
給へり。能女歓喜信受し。此大恩ハ酬ひ難しあ
ハ。いづくまでも上人ハおいきむ所ハ清水を湧

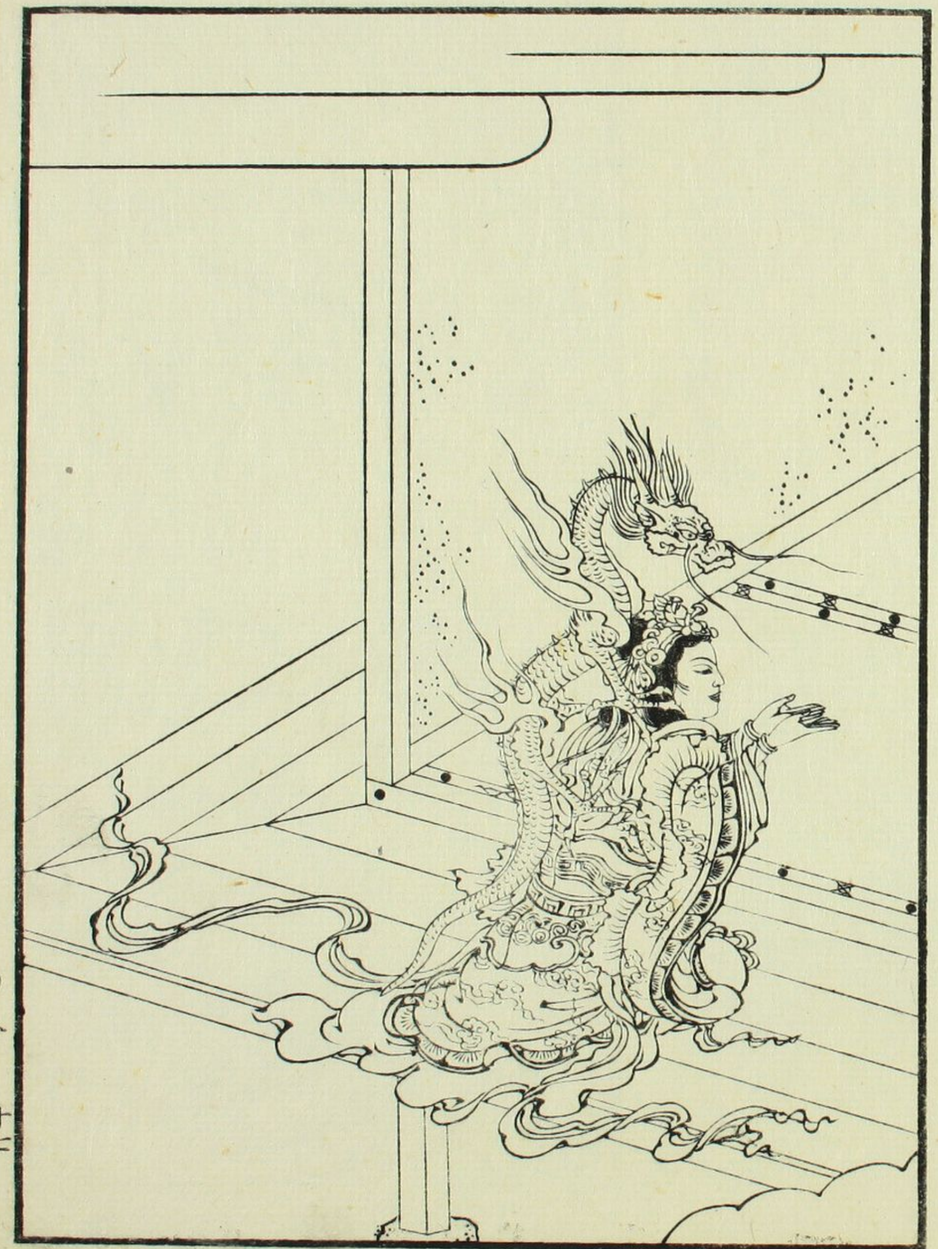
のゝ為まゝせむ。又即今所身よゆゝしき災ハを起す
為れ。その由ハ云ふ所て。彼密徒ハ邪謀を告げ。すでに
ゝり此所を去るのハ。べき紀ゝをひて消亡ぬ。上人
我世地ハ来れるハ宗教弘通乃ためあり。今所作已
ハ辯じ能事畢ぬり。我闘諍を好まず。いづくまでも
行ゝのハゆゝまむとて。即衣鉢を携へ。そのハ寺境
を出。道をゝ行くて同國ある姫川ノ邊ハ行ハ

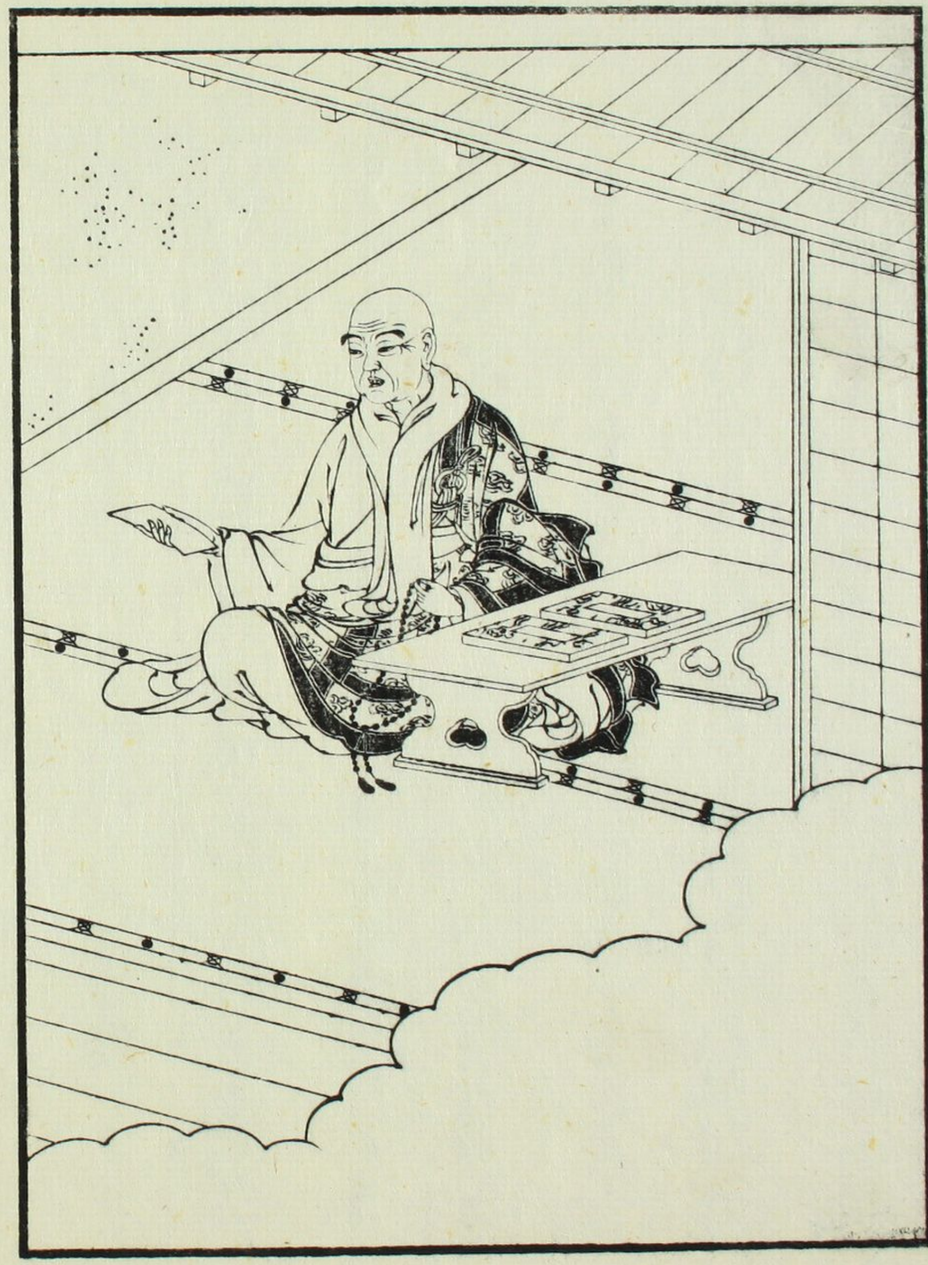
へるふ。此ほどは大雨り水まして。あやうく渡るべ
くもあらざりしが。此のふをもつたづるをのふをもつて。
一女水底より出て嚮導せむといふ。上人その人たづ人
あるぬさきを知て。ふまきよりいて歩を進めのふよ。
陸地を行ごのごとく。足跟少しもぬまづして岸よ到
り給へど。彼女まこと水よ入りて行方あらざりけ
ふり。是ぬ妙龍乃変化なる侍し

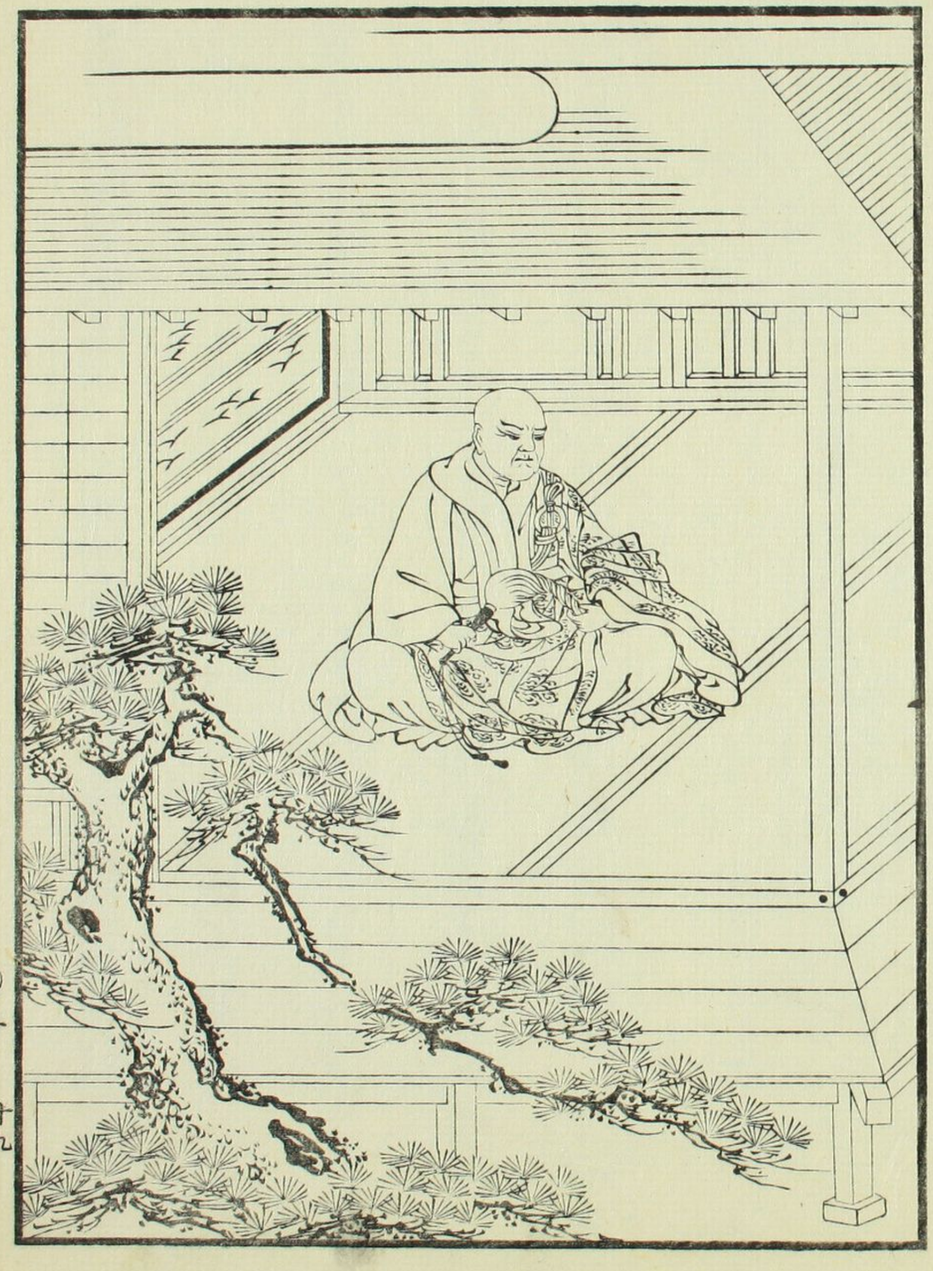
龍女此時。上人乃侍ら所ふハ。必水を湧このせ給ふ
すべしと約したるふりて。上人居住の地よハ皆清
水ありて。後世までも涸ることなく。真像安置れ所を
た清泉湧出乃霊應ぬり。又上人乃徒。定峯随波和
尚。慶長年中　台命を奉て鈴林善道寺ふ住を
らるゝ時。随波上人を法昇進ゝ城外なる躑躅池よ住
て増上寺よ住職たり
める龍神ありて受戒をたへて。和尚即ち法よ慈

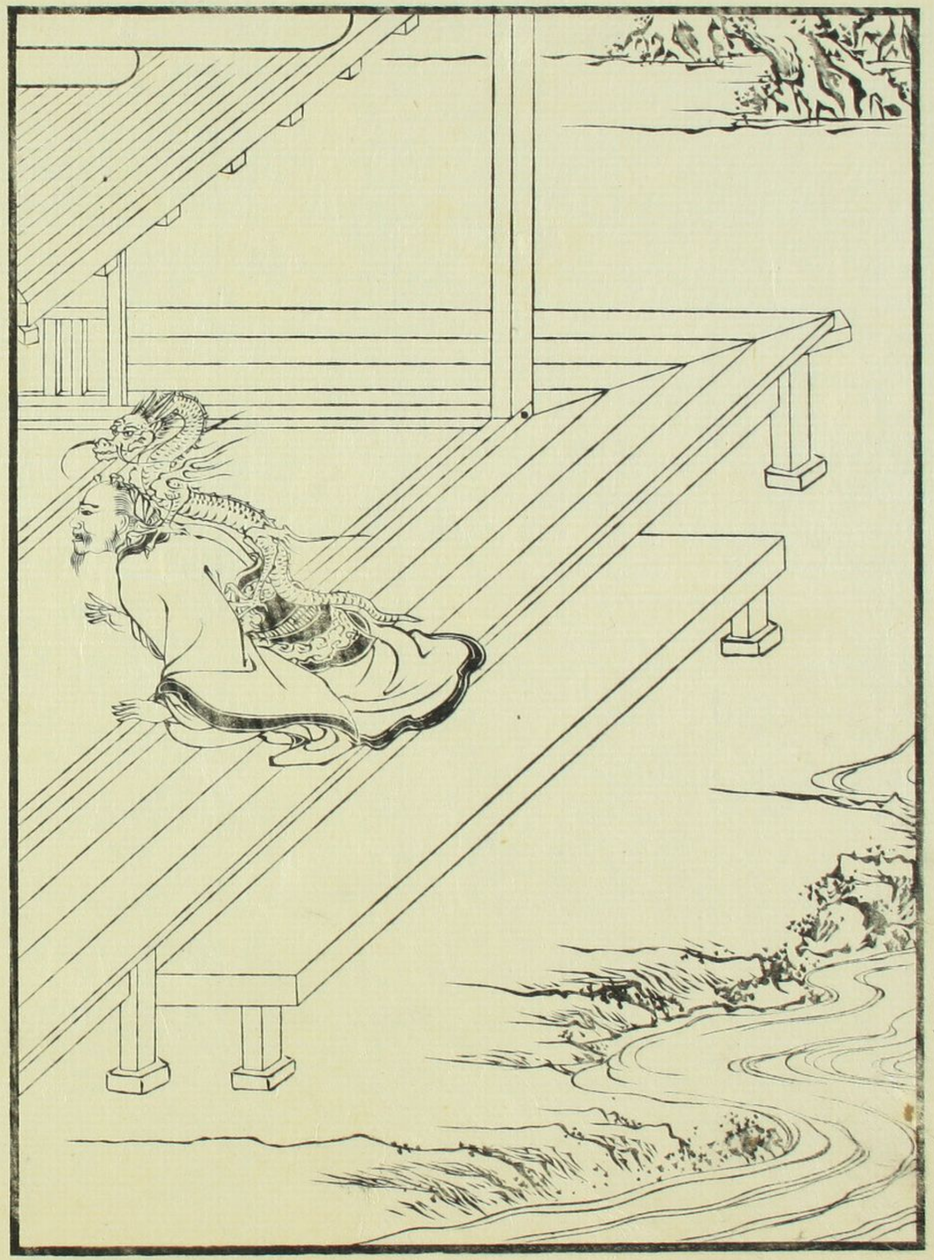
じて説法授戒し。龍誉高天天又八轉ふ作れりと名づけられ
ぬ。こゝ後開山乃祥忌ふ当て。誇焔の現ぜたること
あらぬくありと云へり。又此寺ふも清井ありこれ彼弦
神の告よ依て堀ひるれり。今ふ至ても毎年学徒
信法別紀乃時。此水を汲て澡浴するよ。幾人集ひ汲
ゝを盡ぐゝいへり。又此弦神の出たるハ。開山上人乃時
此事ふて。言天ハ即妙能乃夫るゝとふ説あまたゝ。

今ハ當院乃正信よりて然ふ云へ伝ふ事。
又一説ふ。上人北越ふ民等の。一念乃邪義よ惑ハ
ゝれたるを憐ゝ。彼地ふ行て教諭しのゝふ。邪執
を改め多念の正義よ帰たる者ゝし。一念義の宗
上人を悪ゝ。徒黨をむすびて殺害をむさぼるを
謀まり。妙誇ふ出て雑事を告げたるハ。此時乃
事ふるゝとゝ云へり









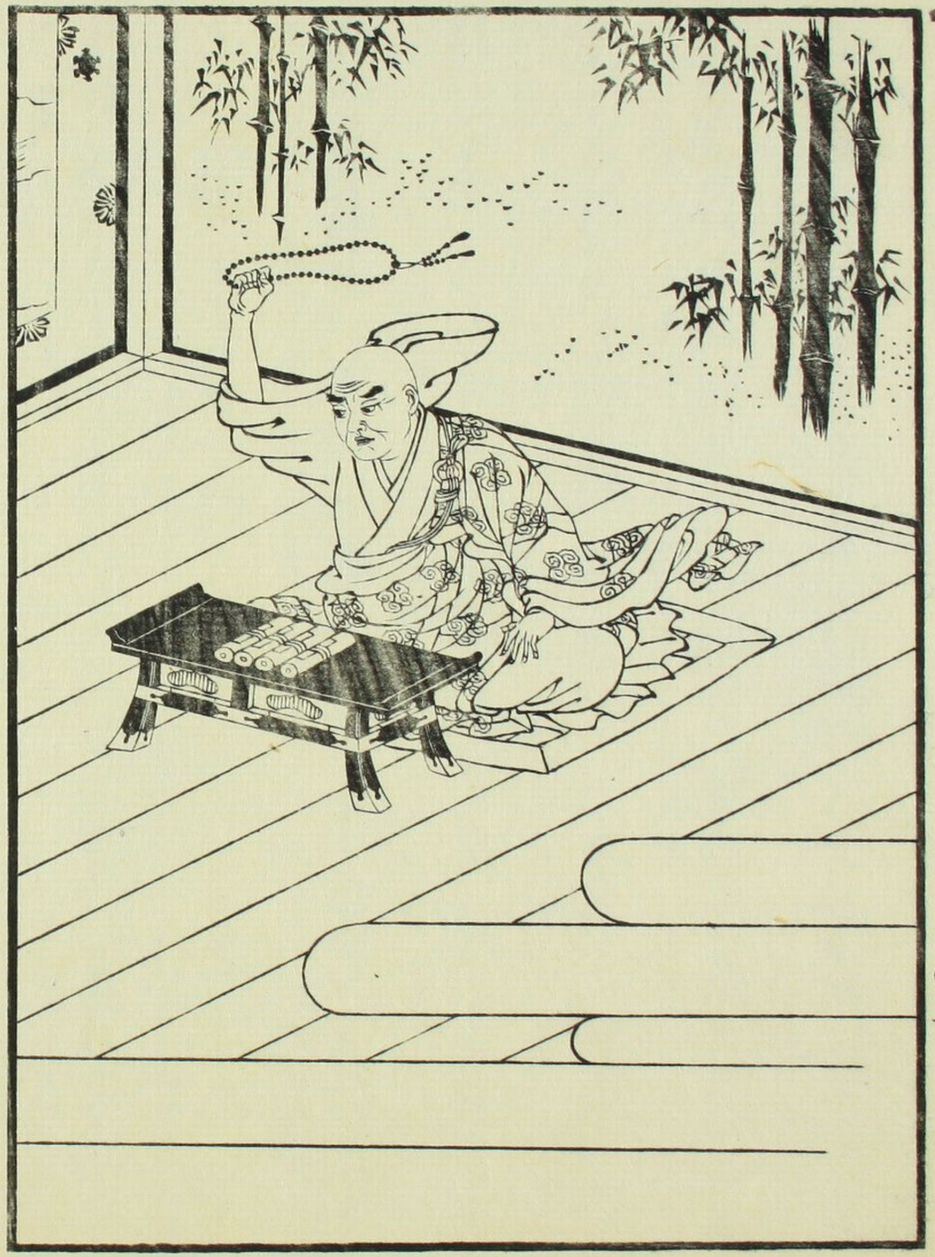
宇都宮蓮性對ヘテ熊谷蓮生ト咲ク習ハシヤリ

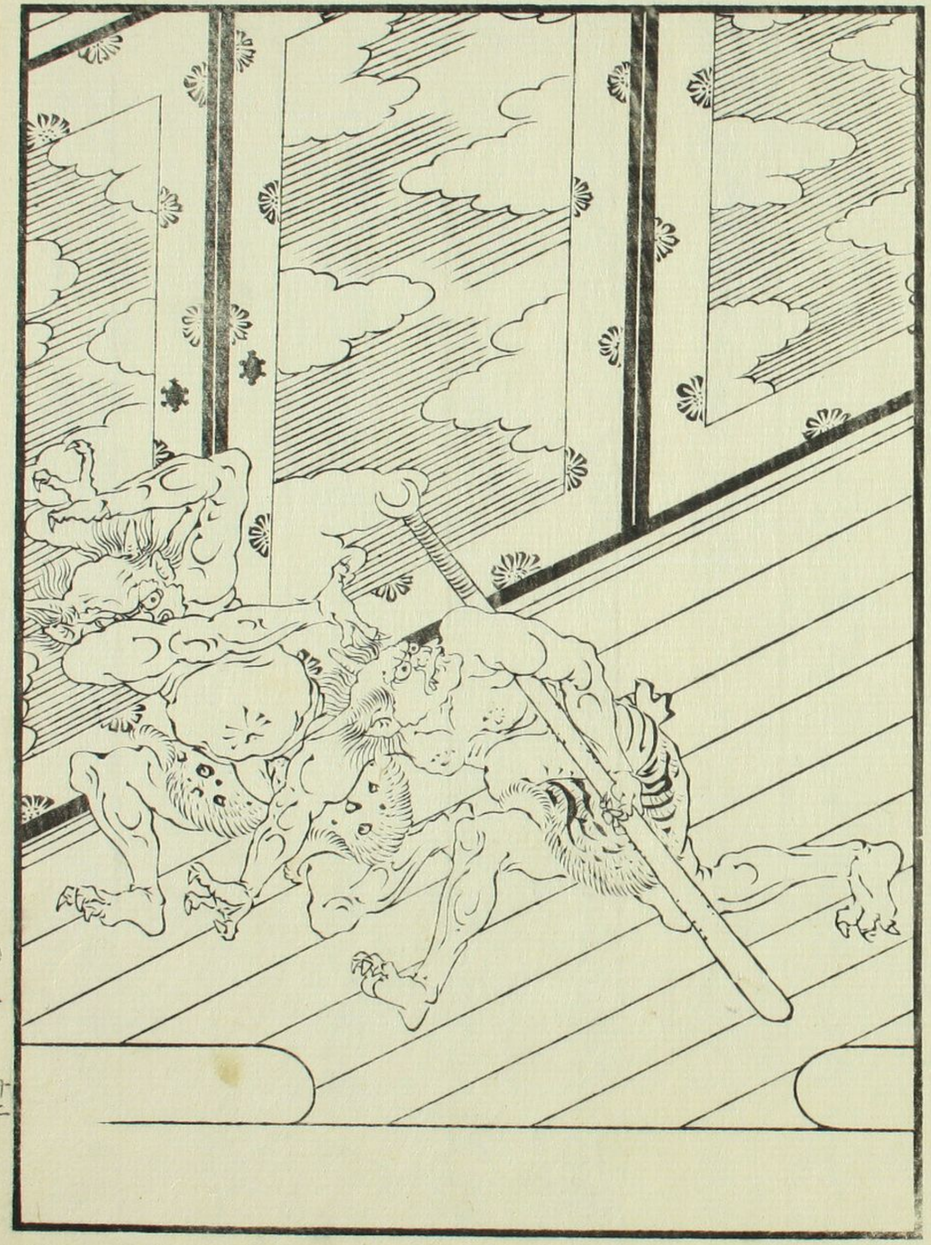
武蔵國熊谷澤ふ。蓮生法師乃舊跡あり。數百年を
歴て荒廢ふ及べるに。上人四方ゝ檀信を勧めて殿舎
を営ム。熊谷寺と名づけゝり。上人乃徒幡海付房
を以て住持ゝり。時　東照神君の佛第五子忠吉
朝臣。忍城乃主なるふりて。　神祖佛巡視乃序。ゆ乃
城ゝ入らを給ふ佛道すゝ。數ゝ此寺へ立寄らせ
給へり。今ふ至まで莊嚴乃精舍あり。ゆゝ乃こゝみ

上人去住ゝ時。此地乃農民ふ久三と咲ふ者ふり。上
人ふ帰依し。随分の信者なる故ふ。毛先久ゝ上人乃
弟子ふなるゝ智雲と称す。老母あり。薙髪して妙智
と称ゝり。一夜上人假寐の夢ふ獄鬼来りて。妙智今
報命終すべし。彼罪業ゝ依ふよふりて。冥官我ふり
令して捕へむ。彼を上人乃化導を以ゝ得脱
すべし。されども因果報應ゝ理を示し。悪人を懲さ

むためあるまでに。彼霊魂を地獄に落し骸をも取去る
ばし。必救濟しのふるれこの主といふ。上人これを聞て。
我如来乃至末世比道師として。居るこの人の墮
獄を見るに忍むやゆて堅く許さば。念珠をもて鬼
を打ち。牙歯二三枚うちぬきとりて差さめへば
ふ。急激乃餘り徧身汗流きこの人へ彼牙落ちり。上
人爰恐ふ驚ふ。妙智ふ代ゆて怨ふ懺悔称名しのくり。

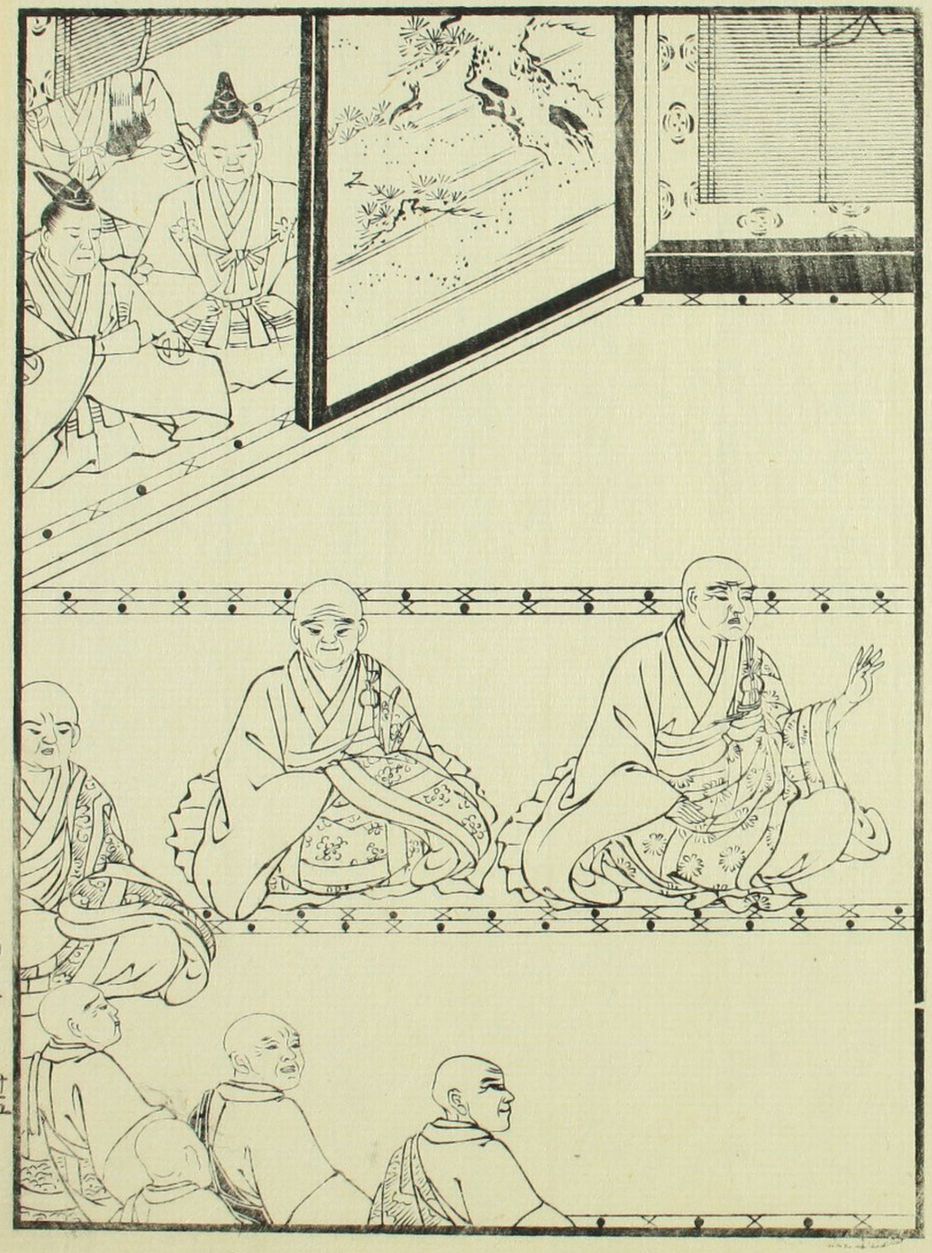
その時分久三郎りて。母比病死を告ぎ引導を請へ。
上人やのて差状を渡り終ふ。久三歳欲ふ塔ば。亡
母一生比悪行ふ因て。永劫苦を受べ紀を救拔し
給へる事乃恭ふをお謝をり。かくて送葬も事終く
畢ゆて後。久三報恩のためゆて。家財を拾て寺領
を造。上人を開祖とし幡龍山久三寺と號し熊谷も
ふ屬をり。彼鬼乃牙をりとゆふ抱ぞふ宮殿ふ祀ちせり

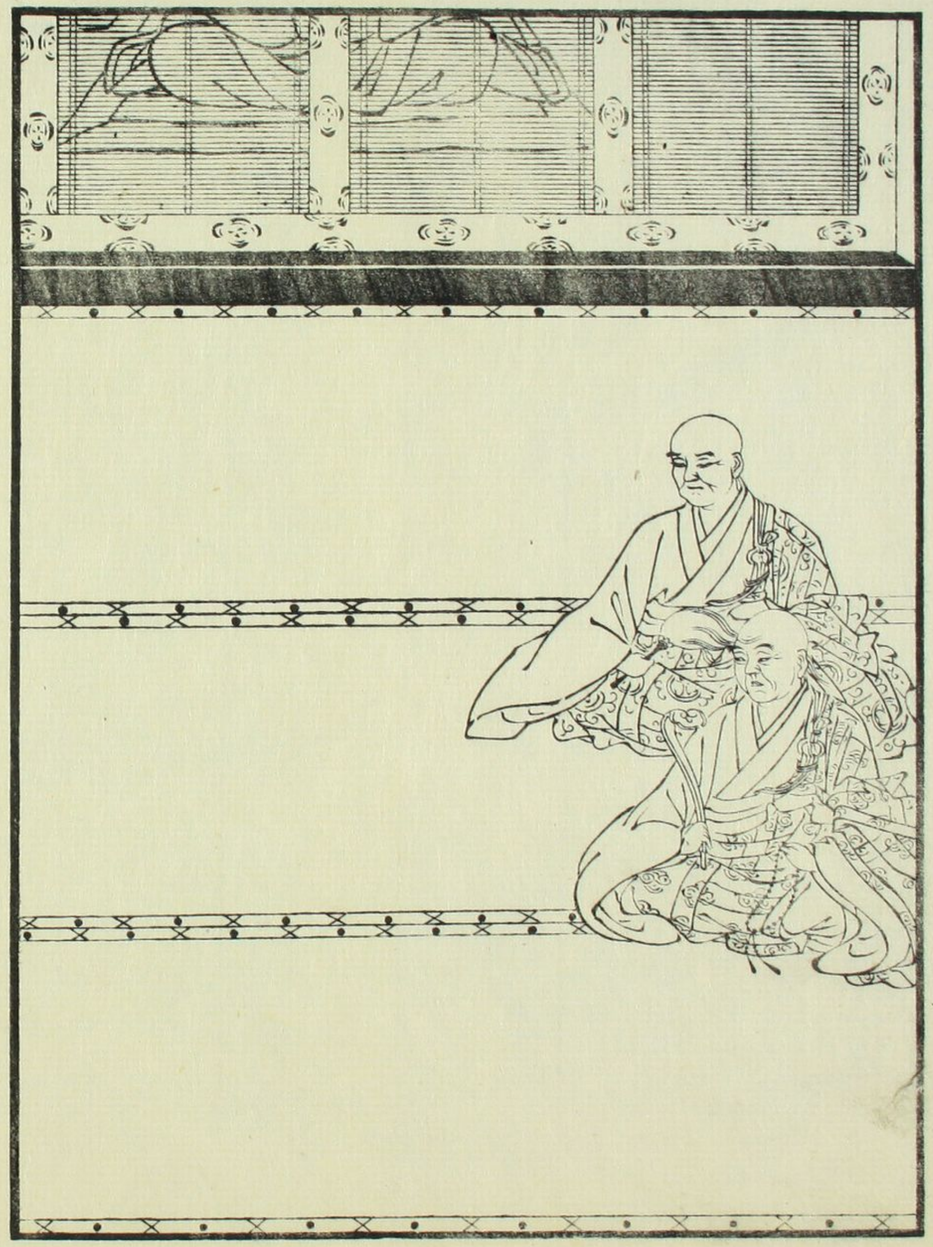




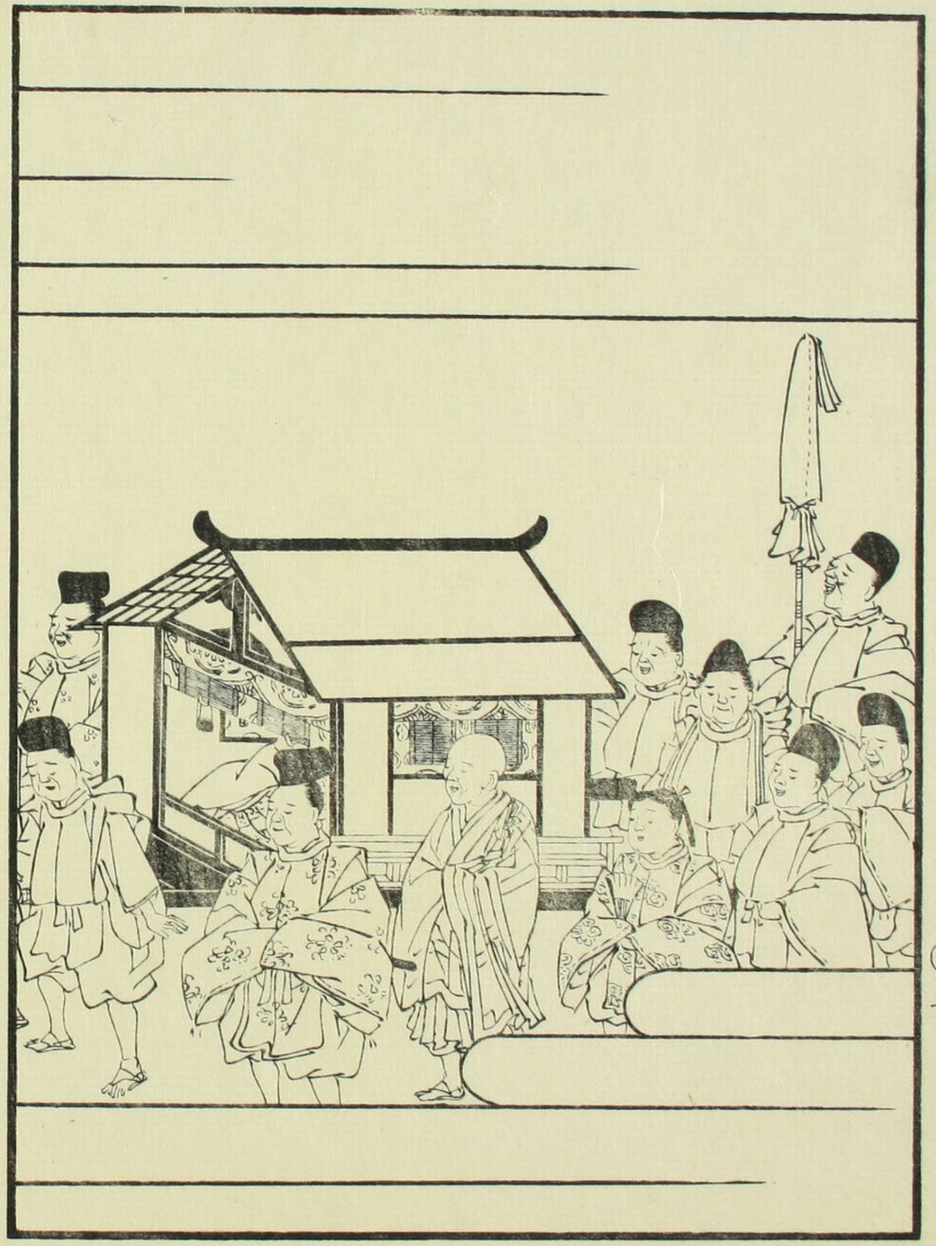
増上寺中興觀智國師。むかし叢林にいまして。上人
ともに教義を講論しかたらひ法契あるふかくして。
常に上人を親しみ敬ひ。上人もまた國師の
徳を崇め了的廓山吞龍等の英俊と共に。股肱
となりて道化を扶け宗法を興隆せしめて。國師
門下十哲乃名誉の至。
東照神君の称ありし内外の学を好ませ給へるより

ありて。時に諸道乃学者を召して海論をなしめ給へ。
一時吾宗の学者に論議を命じ給ふ。上人を第
二座とす。問答数番に及び。智辯を振ひて深理を演
暢しかふ。一座耳を清し歳欲して義説と称せり。
この事数回あり。其年間神君乃命ふかくて
當中に。吾宗と日蓮徒と対論ありしも。座元
に加へられて。智学拔群乃誉を得給へ事





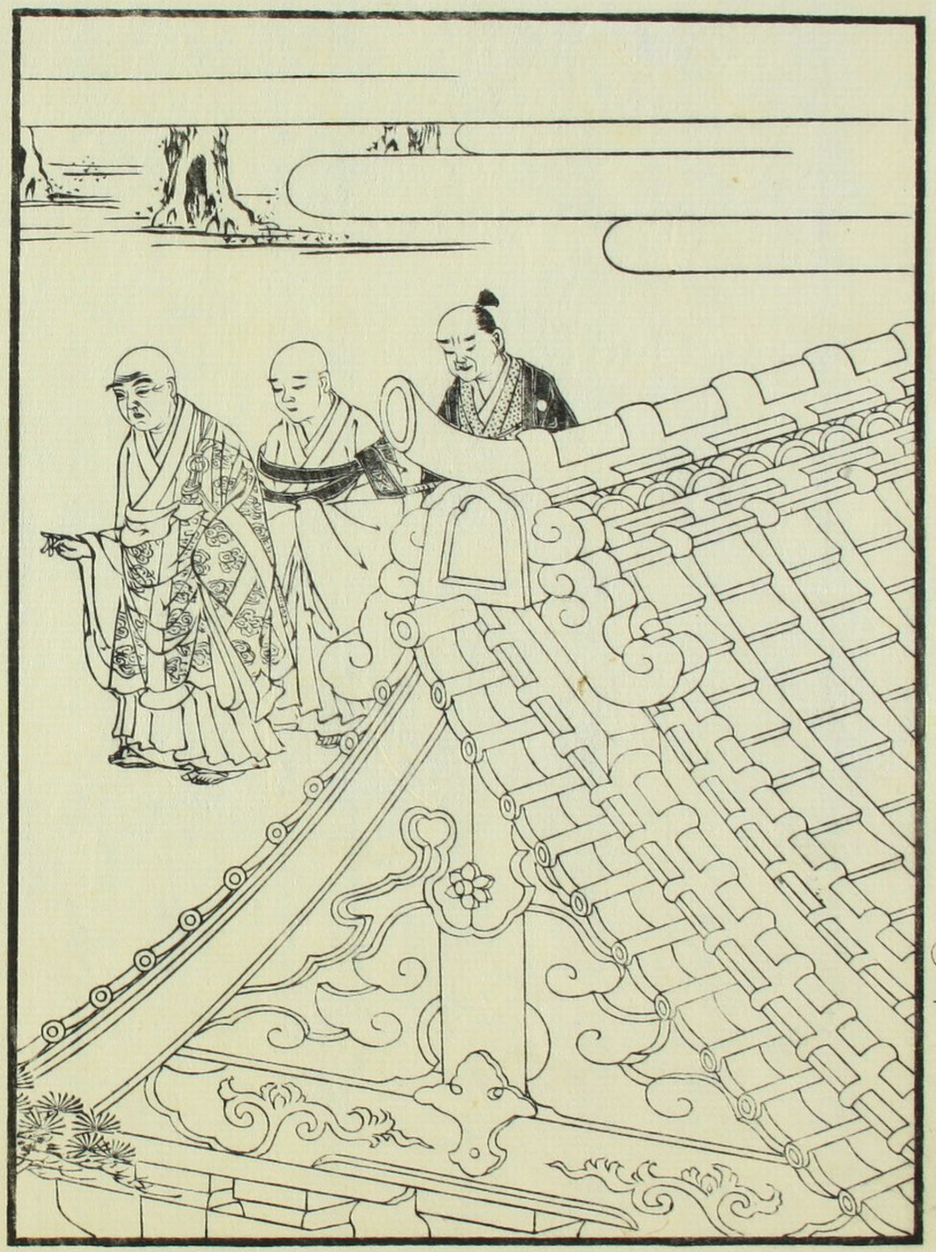
慶長六年。京知恩寺に法主闕如なり。
神君上人を召し。彼寺に住持たるべきを勧めたまへ
命あり。然るに上人。年ごろ因位の道俗を手にかけ
をき置て。移住をむるを苦言とおもほして。強
に辞し申て移住なる。神君別に思召入給へ
事ありてこれ仰言なるし。重て序諭にのぞめ。
上人なほ辞し申ける詞に。為を兼て彼寺に
住し。崇衣を脱ぎ袈裟を着し。
天皇 後陽成院 この称号を上人に道徳殊勝なる事を
聞し給ふ。宮中に召し法話を聞の
を終て 叡感ましまし。公卿嬪御に至るまで皆
高風に浴しなびけられ。法水に流れ
仏宝。鐵乃内外を問はず庶民にとぐ。化を
比利益を蒙る者。数をしらぬ



慶長八年。召ふるゝて江戸ゝ参ぜへはり。
神君。京知恩寺ハ　勅願ゝ古刹ゝ。百箇遍祈禱
ゝ霊場なり。　柳営結護のゝあゝ。彼ゝを摸しまゝべ
しゝゝ　命ありて。即神田乃ゝ々の後ゝ　ふゝ地を宝
免。銀米ゝ手を賜ハまゝて。上人此　厳命をゝふりて。普
ゝ有信を勸めゝゝゝ。府下ゝ士民随分の浄財を喜
捨しゝ力を合ゝて助成し。日あゝゝゝて殿堂門宇

子院悉乃造立ゝゝ功全備きり。　台命よりて。
神田山。新知恩寺幡随院と號し。長日百箇遍祈禱の
霊場ゝゝゝへり。のゝゝゝ十八檀林の随ゝ加へ
ゝゝて。浄宗乃学山　台命住職の大刹ゝゝゝり。後
又故ありて下谷の池端ゝ移事。明暦三年回禄乃災
ふのゝゝて浅ゝ々の地ゝ移ゝり。此時ゝゝ幡隨院
を寺ゝ称號ゝて。開山乃遺徳ゝゝ世ゝ残ゝ。

道俗の淨作日に盛なりしかば神田ありしに
時に地枯涸ぬれば用水乏しかりけるに時の住持素
一法蔵菩薩に願て井を鑿しむるに果して清
水を得たり。下谷に移りても。ち境に清水涌て旱天に
も涸ることなかりき。又今此地に移る時に掘てば
直に薙沼なるべし。井水皆濁泥の濁ありて飲用に堪へず。
唯妙能ふ所に掘る井水清水にして汚氣
なし。今に至るも沸き出て湧出きり。第十八世
称誉真察和尚。後知恩院に住して碑銘を立られて。妙能
大僧正に任ぜらる
水と称する是なり。昔八皆上人の左世に能女此誓約を
しふられるなりと。上人乃彫像安置の所に霊
泉涌出て奇特ありき。此世人此能水を汲て上人の護
符を受て井水乃濁を除のむるを祈り。霊験を得る
者多し。ならびに利益実なるべし



洛東長徳山知恩寺　百万遍と通称す　八浄土真宗四箇本山乃
随一なり。元始洛北なる今出川ふもとに慈覚大師の
造作せし坐像乃釋尊を安置せるよりて元出川の釋
迦堂といひ。元本尊乃賀茂大明神の本地佛なる故
ふ賀茂神宮ともいへり。宗祖大師。吉水ゆ庵室ふ
一時。賀茂大神乃感應ふよりて。移住しめし舊跡
なり。大師ゆ嫡弟。勢觀源智上人　備中守平師盛朝臣の子
小松内府重盛公乃孫也

付属を受て住持し。師恩を報ぜむが為ふ。大ゆ新
堂を立て知恩寺と號せり。元我宗建ゆ始れり。この
ゑて勢觀上人。明禪聖覚静遍ふの諸大德と共ふ紹
隆弘教しなり。元付弟蓮寂信慧上人　大納言兼良の乃子。元聖法政
大臣兼房公の孫也　第三世となり。法脈を傳て浄宗ふの弘通いと
盛なるなり。浄土乃正義法西流と。此寺の法義と。全く同じふ
事長れ　ふりて。世上人乃時。法西ふ混入せり。元源由
ハ器に　第六世如空上人乃時。　後醍醐天皇。元法

蜷連綿数代を経て宗義は真正なる事を聞こしめ
して。上人の智慧如一國師乃號を賜ハせり。同時代
元亨元年夏大旱苗を枯らし。秋地震疫疾あて死傷
多数を出ず。天皇勅して諸寺諸社に祈らせ給へ
甚験なふ日て。第八世空圓善阿上人に勅を下し
給へり。上人即百萬遍念佛の大功德を奏し。一千八十万
大念珠を造り。禁中に於て。七日毎回の勝會を設び

念誦せしに。速に霊應あり。一千八十百万返大念珠八世阿
天皇感歎感悦し給ひ。その恩賞として。禁中に侍
宮庫に所得来たり。弘法大師芸能利劍名號を
賜ハり。且その功を旌しぬ。百萬遍乃勅號
を賜ハる。是より以来。毎月十六日。此名號を称る
ことを。百萬遍念佛を修して。國家永昌を祈り奉
り。代々住持参内院参乃たびごとに。彩雲の

宸札を奉ぜらる。今ふるまで恒式なり。

後花園院天皇乃文安六年。同御代ハ寛正二年。同

四年。後土御門院天皇ハ文明元年。水災疫疾おこ

りし。勅を下して百箇所を祭をしめ。皆速

ふ霊験ありしよりて

朝廷の御崇信弱からず

ば。後花園院天皇八第十九世大峯上人乃時。為祈願所。

須致浄土一宗興隆。勅書を下し給ふ。第廿一世

法峯上人ハ御依まして。崩御ふ陪まをの

時。御善知識ふ召を給ふ。第廿五世傳峯上人乃時。

後柏原院天皇乃　勅額ぞ　宸筆一枚起請

文を賜ハる。且　勅命ふ依て。禁中ゟ大原問答

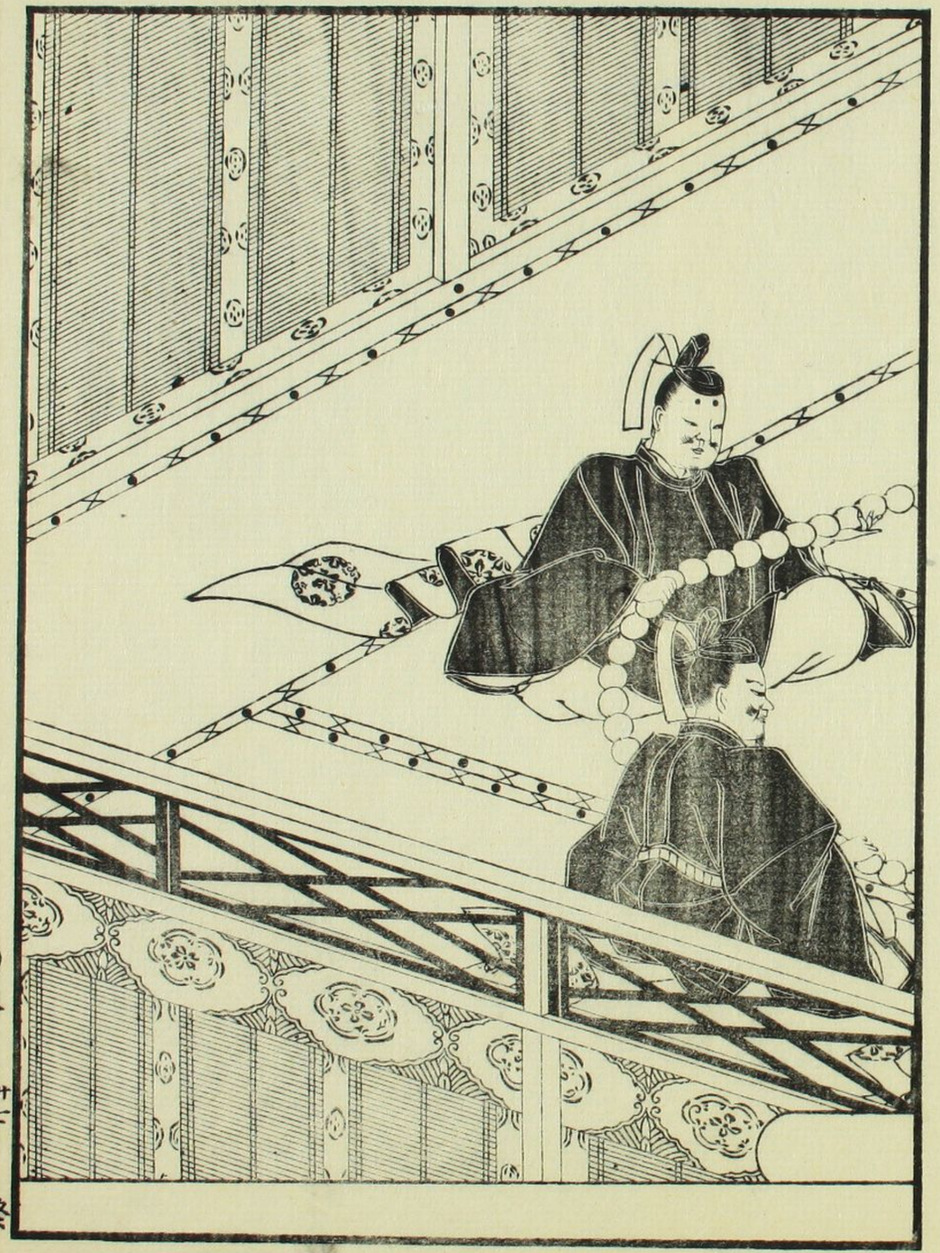
ハ海法をを行ひ。此時三條内大臣実隆公乃娘　出岡公ゟ伝来ぞ　剰傳峯の

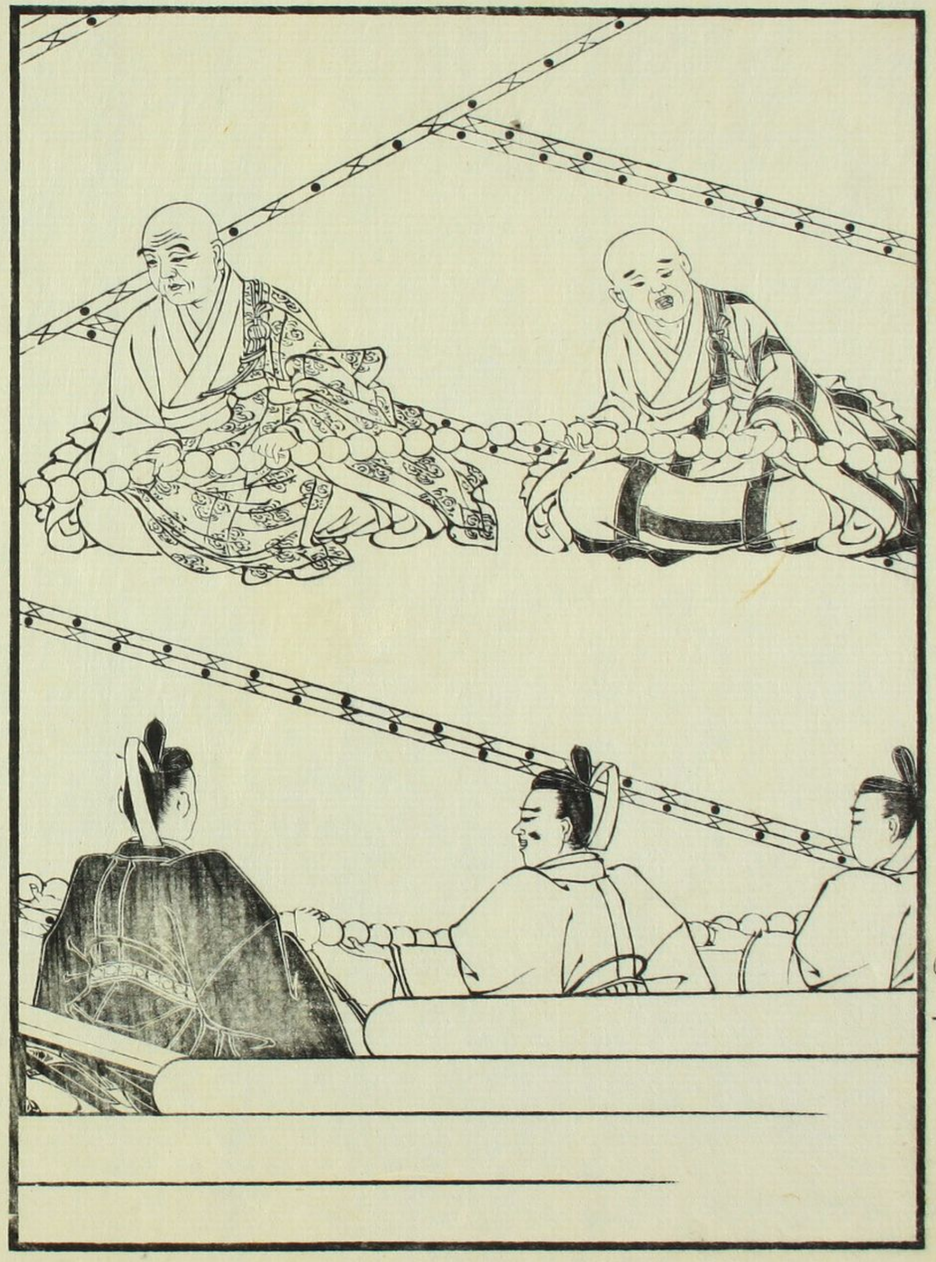
肖像ふ。宸翰乃御賛を給ハる。前代未聞乃盛

事なれむ。歴代ハ代ハ住持。寺門興隆祈願賜ふ

綸命を拜をしまてるまゝ。一〻載ふゑ遑あらず。又
足利義輝將軍ハ。第廿九世岌善上人ふ。一宗嫡流乃
教書をらへの。豊臣秀吉公ち。世二世奉答上人の
道徳ゑ仰して。寺領朱章を寄附し給ひ。且應仁兵
火乃後。未再建るのまゝを。檀越となりて成就し給
へるふらして。輪奐具足乃大剎ゝれまゝり。第世三世ち
ら情深上人ちるま。ゝらり後代ゝ住持皆　柳営ち

命を受て後。勅請乃　綸旨を拜す例ゝまゝり。
東照神君乃上人を選て住職をしめ。まゝゝれるを
府下ふ模して。万世不朽ち祈願所を立めひしふ。の
ふ世ゝ尭ふ事ふを具ふ同し名を世。御景仰の厚ち
ゝり思ひたまゝ給へるまて。世ふ有難ふ御事ゝれ
ぞ。のまゝ称く世人ゑまゝ
まゝを記すふゝ手





幡隨意上人傳上

彫工　江川仙太郎